

まちの魅力を創造する資源とその環境要因の分析

—新宿のまちの魅力の研究から—

渡部 春佳 *Haruka WATANABE*

津田塾大学 非常勤講師
(元新宿自治創造研究所非常勤研究員)

阿部 名保子 *Nahoko ABE*

横浜市都市整備局地域まちづくり課
(元新宿自治創造研究所非常勤研究員)

■**要旨**：本研究は、まちの魅力を創造している人々の活動を支える環境要因はどのようなものかについて、新宿を事例に都市論と文化論の視点から考察することで、これまで捉えられていなかった「まちの魅力」を創造するものを明らかにした。新宿には、超高層ビル群がある一方、中層の小規模な建物も多く存在することで、多様な人が集まり交流することができ、これまでになかった独自の文化やビジネスを創りだしていることがわかった。そのような環境要因をふまえると、魅力あるまちが持続的であるためには、様々な用途が混在する多機能なまちづくりの推進と新旧を併せもつ空間の創出が必要となる。本研究で得られた知見は、同様に人をひきつけている福岡市においても、今後の人口減少時代に持続的な魅力あるまちづくりを検討する上で寄与すると考えられる。

■**キーワード**：まちの魅力、地域資源、都市計画、まちづくり、文化論

1. はじめに

1.1. 研究の背景

日本では現在、少子高齢化が進み人口減少が始まっている。地方では、既に中心市街地がシャッター通りとなり、空き家が増え、まちを維持していくことが難しくなっている。そのため、全国各地で「賑わいの創出」を目指したまちづくりが行われている。しかし、人をひきつける魅力あるまちとはどのような“まち”なのか、その魅力を創造している資源や環境は何かについての議論は少ない。

一方、新宿区は、1日あたり乗降客数日本一の新宿駅をはじめとし、多くの交通路線が集まるターミナルとして、外国人観光客も含めて多くの訪問客が、買い物やエンターテイメントなどの目的で訪れている。そこで、新宿自治創造研究所では、平成28年度から29年度にかけて、「訪れる人」にとってのまちの魅力とは何か（新宿区の魅力は何か）という視点から研究を行った¹⁾。具体的には、まちの魅力となる資源にはどのようなものがあるかを統計データから整理し、GISを用いてその分布の特徴をみた。

そして、これらの資源がどのような歴史的背景をもとに集積してきたかを考察し、まちの魅力形成メカニズムを策定した。

本稿は2年間の「新宿区のまちの魅力の研究」から見てきた、魅力を生み出す人々が集まってきた環境要因について、新たなデータと新宿区で活躍するキーパーソンに対するインタビュー調査結果をもとに考察し、福岡市の都市計画への展開可能性を検討したものである。福岡市は、人口が減少する地方都市の中でも人口が増加しており、新宿と同様に人をひきつけている。また、アジアを中心に乗降客数の多い福岡空港を持ち、国内外の来街者で賑わうまちである。

本稿の構成は次の通りである。以下の第1章では、まちの魅力に関する地理学、都市論、文化論を中心とした先行研究のレビューを行う。第2～4章で新宿区の事例研究を行う。第2章では、他自治体との比較から、新宿区にどのような特徴ある地域資源²⁾があるかということを示す。次に、第3章では、歴史的に、特徴ある地域資源が集積していった経緯を

明らかにする。第4章では、集積が起こった条件のひとつである「場」に焦点を当て、どのような環境の下で地域資源が集積したかについて考察する。最後に、第5章で前章までの結果を踏まえ、新宿区をはじめとする都市が魅力あるまちであり続けるための方向性について提言する。

1.2. 先行研究

これまでの研究で、魅力的な都市とはどのようなまちか、または、どのようにして魅力は形成されたのかについて実証的に研究したものはほとんど見当たらない。そのため、同テーマに関連が深いと考えられる研究分野の議論をもとに検討する。まず、地理学から、都市において人が賑わっている場所—繁華街・盛り場をテーマにした先行研究を整理する。次に、欧米の都市論から、「魅力的な都市を形成する構成要素は何か」の視点で書かれた論文をみる。最後に、文化論の研究から、都市の文化が開花する要因や形成過程を研究したものを取り上げる。

(1) 地理学からの研究

地理学の領域から繁華街を対象とした研究がある。まず、松沢⁽¹⁾は、新宿、池袋、渋谷などを事例に、様々な指標に着目することで、大都市の中で発達する繁華街の構造を明らかにしようとした。具体的には、通行者の男女比率、大衆誘導施設（デパート、映画館・劇場）、洋装店、バー、キャバレーなどの施設の数量把握および種類別分布状況を調査し、都市を中心域、中間域、周縁域からなるとし、人々の回遊を誘引する構造を捉えようとしている。

さらに、盛り場をミクロに捉え構成する要素を分析することで、地域的な個性が生まれる過程を究明する研究がある。牛垣⁽²⁾は、特定の分野・業種の店舗の集積があり、まちの景観や訪問者に特徴のみられる神楽坂や秋葉原などの商業地域を事例に、そのような地域に「地域的個性」が形成されていくプロセスや、歴史的・地理的要因を模式的に示すことで考察している。

(2) 都市論からの先行研究

魅力的な都市について書かれた、都市計画家の論文を挙げる。ル・コルビュジェ⁽³⁾は、高層ビルを建設して空地を確保するとともに、街路を整備して

歩車分離することにより都市問題の解決を図ることを提唱している。これに対して、ジェイン・ジェイコブス⁽⁴⁾は、多様性は魅力的であることや活力のある都市の条件とし、機能優先のコルビュジェを批判した。また、アラン・ジェイコブス⁽⁵⁾は、都市デザイン上配慮すべきは、暮らしやすい街路と近隣、適切な最低密度、都市の多様な用途と混在、公共的な空間を取り囲む建物などの街並みとしている。近年では、リチャード・フロリダ⁽⁶⁾が、魅力ある都市は才能豊かな人を惹きつけ、生産性も高まり、経済成長をもたらす、成長する大都市となると主張している。

(3) 文化論からの先行研究

文化論からの盛り場研究では、盛り場を生きられた空間として捉え、都市空間を生きる人々の生活意識や存在のありようと空間との関係に重点をおいて追及している。吉見⁽⁷⁾は、盛り場を施設の集合や特定の機能をもった地域としてある以前に、まず「出来事」としてあるとし、盛り場に集う人々が、その集っている盛り場との相互作用のなかで紡ぎだしていく固有の磁場に基づくものとして、担い手となる人々に着目した。特に、新宿においてアングラ文化が隆盛した1960年代から1970年代までを対象として、新宿2丁目の赤線や歌舞伎町、ゴールデン街の存在などに触れながら、新宿文化や「新宿らしさ」が醸成された経緯をまとめている。当時の新宿は、たまり場や比較的安価なアパートがあり、高度経済成長に伴う東京への人口流入を背景に、地方から上京して間もない若者たちが気軽にたむろする場を提供していたと推察している。

増淵⁽⁸⁾もまた、都市の「文化的装置」という概念によって、都市の中のバックストリートのような空間が持つ文化創出機能に着目している。明治時代の日本の文士村や、1960年代から1970年代までの新宿の風月堂、ゴールデン街、花園神社の周辺を引き合いに出しながら、都市の中の空間が、人間がフェイス・トゥ・フェイスのコミュニケーションによって感性が磨かれていく、創造のための場として機能する可能性を示している。

1.3. まとめと本研究の視点

以上より、地理学の分野では、まちの魅力の構成要素として、歴史的・地理的事象から人が集まってくる要因を探ろうとするが、活動する人々を捉える視点が欠けている。

一方、都市論では、魅力ある都市は多様な人々が居住することができるという視点から、そのまちのしつらえ（造りやデザイン）を議論している。また、文化論では、路地裏やパフォーマンスの場となる小さな劇場が、その場所らしさや文化を生み出すことに重要な役割を果たしていることを指摘している。よって、都市を成り立たせている歴史や地理にも考慮しながら、魅力（独自の文化）を生み出す人の集積に焦点をあて、様々な地域、属性の人々が集まってきた環境要因を明らかにする必要がある。

そこで、本研究では、新宿の魅力を創造する人々の活動を支える環境要因はどのようなものかについて、都市論と文化論の両方の視点から考察することで、これまで捉えられていなかった「まちの魅力」を創造するものを明らかにする。

2. 新宿のまちは、他のまちと何が異なるのか

本章では、多くの人が集まってくる新宿が、他のまちとどのような点で異なるのか、「新宿区のまちの魅力の研究」をもとに、特徴的な地域資源を概観し、その違いを明らかにする。数字は特に言及のない場合は、平成26年「経済センサス」に基づく。

2.1. 歴史・伝統資源の集積

東京23区内には、江戸時代に大名屋敷の庭であったところが23箇所の庭園として今も残っている。文京区には最も多い5庭園あるが、新宿にも、新宿御苑、甘泉園庭園、大隅庭園、戸山公園の箱根山の4庭園が残っている。

また、天龍寺や四谷の寺町、花園神社、流鏝馬で有名な穴八幡宮、三十六歌仙の須賀神社など神社仏閣も多い。仏教系寺院は台東区(340)、港区(243)に次いで、新宿区(137)は3番目に多い。キリスト教の寺院も、世田谷区(76)、杉並区(58)に次いで新宿区(52)は3番目に多くなっている。

このほか、茶道、華道、箏曲、能楽などの伝統芸

能の拠点も多くある。例えば、23区内には11の能楽堂があるが、新宿には木造建築の矢来能楽堂がある。箏曲では生田流宮城宗家が住んでいた居宅が宮城記念館として利用されている。茶道では裏千家の東京道場や今日庵、華道では新進の龍生派や大和華道会館等の本部がある。

2.2. 教育資源の集積

全国(780校)で最も大学数(短期大学除く)の多い都道府県は東京都で138校あるが、新宿区には、23区で4番目に多い8校の大学がある。これらには、明治時代に設立された、早稲田大学や東京理科大学等の歴史ある大学(5校)と、東京医科大学や東京女子医科大学等の医学系大学(3校)を含んでいる。また、専門・各種学校数も東京都には全国(4,355校)で最も多い557校あり、そのうち新宿区には72校と最も多く立地している。さらに、日本語学校は2017年12月現在55校ある(文科省「平成29年度学校基本調査」)。これらの教育機関があることもあり、2016年の全国の外国人留学生(約277,000人)の概ね6%の約16,000人が新宿区内に住んでいる(法務省「平成28年12月在留外国人統計」)。

2.3. 文化資源の集積

(1) 芸術家

人口1万人あたりの芸術家(著述家、美術家、音楽家等)の人数は、東京23区に集中しており、渋谷区、杉並区、目黒区、港区、世田谷区、新宿区に居住する割合が高い(平成27年「国勢調査」)。

(2) 飲食施設

全国には約62万軒の飲食施設があり、うち東京都には約8.4万軒ある。港区が5,827軒で最も多く、新宿区は5,708軒で2番目に多い。そして、歌舞伎町、ゴールデン街、新宿2丁目、神楽坂などの繁華街があるため、バーや居酒屋などの割合が高い。また、全国には約7万軒の喫茶店があるが、東京都には7千軒あり、新宿には、千代田区(505)、港区(478)に次いで3番目に多い469軒が立地している。この他、大久保・百人町の韓国料理店を始め、12ヶ国以上の多国籍料理店が365軒あり、14軒のジャズ喫茶があるなど、音楽を鑑賞することのできる喫茶店も多い。

(3) 劇場・映画館・ライブハウス

新宿駅東口を中心に大正末期から多くの映画館が開館しており、現在も映画館の事業所数は15箇所と23区で最も多い。図1は、文化資源に関し、全国の事業所数（芸術家は人数）に対して新宿区が何パーセントを占めているかを算出し、23区平均の割合と比較したものである。これを見ると、劇場やライブハウスが全国で最も多く集積している。

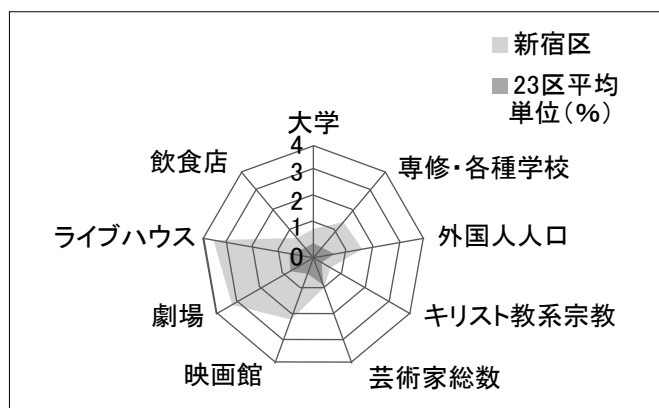


図1 新宿区の特徴的な文化資源

出所：平成26年経済センサス及びiタウンページ (ライブハウス・劇場)、平成27年国勢調査より作成

2.4. 商業資源の集積

平成26年「商業等統計調査」によると、新宿区内の小売業事業所数は23区で世田谷区、大田区、足立区に次いで第4位、売場面積では第1位であるが、年間商品販売額では銀座を抱える中央区に次ぐ第2位である。

このうち、百貨店・総合スーパー店舗数は全国に1,608軒あり、愛知県が最も多く(157軒)、次いで東京都(133軒)、大阪府(103軒)と続く。新宿には総合スーパーは少ないが、伊勢丹を始め、小田急、京王百貨店、丸井の4軒の百貨店があり、ルミネや新宿ミロード等の大規模な商業ビルや地下街が多数あるのが特徴である。

このほか、カメラ専門店から発展したヨドバシカメラ、ビックカメラ、カメラのキタムラなどの家電量販店が11店舗と多く、オリンパスプラザやニコンプラザなどのカメラ関連のギャラリーがあることが特徴である。また、楽器店も全国の3,230軒のうち、64軒が立地しており、都内で最も多い。

2.5. 産業資源の集積

新宿には神田川が流れ、これと関連した染色業や印刷業などの地場産業が集積している。図2は、図1と同様に、産業資源に関して新宿区と23区平均の割合とを比較したものである。染色整理業は全国に3,303箇所あり、京都府や愛知県に多く立地しているが、東京都には216箇所あり、新宿区には最も多い34箇所ある。印刷・同関連業は全国に32,461箇所あり、東京都には7,964箇所、新宿区には最も多い700箇所ある。出版業は全国に4,856箇所あり、東京都には2,688箇所あり、新宿区には、千代田区(583)に次ぎ二番目に多い373箇所ある。

また、新宿区には芸能産業(芸能プロダクション)の集積もみられる。23区内では港区、渋谷区、世田谷区に次いで4番目に多いが、近年では吉本興業などお笑い系の事業所が移転するなどの動きもある。

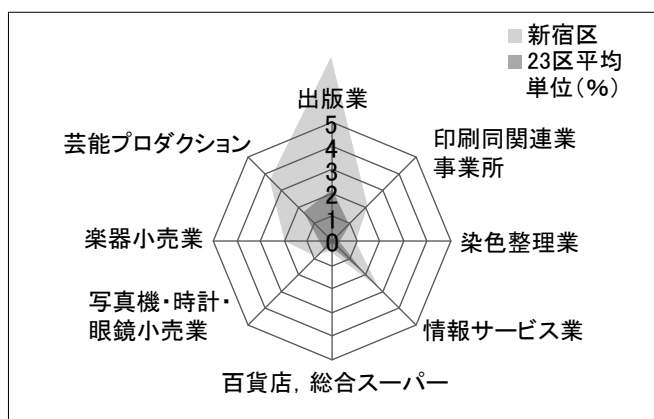


図2 新宿区の特徴的な産業資源

出所：平成26年経済センサス及びiタウンページ (芸能プロダクション)より作成

3. 地域資源の集積の経緯

前述した特色ある地域資源のうち、新宿文化へと発展していったものを中心に、どのように集積したかについて「新宿区のまちの魅力の研究」をもとに歴史的にまとめる。

3.1. 大学のはじまりと文化人の集積

江戸幕府開府以降、新宿は江戸という都市の周縁に位置し宿場町として発展した。宿場町には飯盛り女がいる茶屋ができ、これらが遊郭となって盛り場を形成していった。

さらに、1858年、日米修好通商条約や日仏修好通商条約などが結ばれると、外交使節や貿易商と

にも多くの宣教師が来日した。特に、明治に入ってキリスト教の教会や受洗した教育者により学校が建設されるようになった。まず、屋敷跡の空き家・空地があった神田に多くの大学が創立され、本郷では1877年、東京大学が誕生した。その後、市街地が広がるにつれ、新宿にも教会や学校が建設されるようになった。例えば、1881年、東京大学の卒業生たちが物理学を教える東京物理学校（現、東京理科大学）を飯田町（現、九段下）に創設し、後に神楽坂に移転してきた。

このような施設が新宿に生まれた背景には、大名屋敷であった広大な種地の存在があった。明治維新により不要になった大名屋敷は、教育施設等の公共施設に転換された。1882年に開校した東京専門学校（現、早稲田大学）は、もともと抱屋敷の土地を利用していた⁽⁹⁾。

そして、大学の存在は文士たちを呼び込んだ。新宿には、明治から昭和初期にかけて、多くの文士が住んでいた⁽¹⁰⁾。明治になると、夏目漱石や尾崎紅葉を中心として、門下生や大学の級友などが集まってサロンを形成し、同人誌などを刊行するようになった。その後、早稲田大学で教鞭をとっていた坪内逍遙が島村抱月らとともに新劇運動のための文芸協会を設立した。また、大久保地域では、岩野泡鳴や国木田独歩ら、文学者や画家たちが集まって住むようになり大久保文士村を形成した⁽¹¹⁾。郊外であった大久保には、社会主義者なども多く住むようになった。

大正に入ると、住宅開発が進んできた落合地域の周辺に、村山知義らのダダイズムの芸術家やプロレタリア文学作家、女性作家が多く住むようになり、落合文士村を形成した。昭和初期には、四谷の花園アパートなどに、中原中也、青山二郎、小林秀雄らが住んでいた。そして、文士たちの存在は同人誌の発行や書籍の出版を促し、印刷業や出版業の集積が始まった。

また、神楽坂は、1857年頃、善国寺の門前に非公許の遊女屋の集まる岡場所があったため、風紀の取締りから遊女から芸妓への転身が進み「花街」となった。1874年の火事により神楽坂の花街は全焼

するが、その後も多くの夜店で賑わい周辺に演芸場や寄席も増えた。付近にあった早稲田大学関係者が出入りし⁽¹²⁾、日清・日露戦争時に、三業地（料理店・置屋・待合）として発展した⁽¹³⁾。

3.2. 関東大震災後の大衆文化の隆盛

新宿には、関東大震災等の自然災害の発生を契機に、比較的固い地盤を持っており、被害が少なかったため、先進地の銀座や神田から劇場や百貨店といった地域資源の流入が起こった。

喜多川守貞によると「京都は四条河原を専らとし、大阪は難波新地、江戸は陵墓久場葦東西浅草寺奥山を専らとす」とあるよう、江戸中期以降の盛り場の中心は両国や浅草であった⁽¹⁴⁾。しかし、関東大震災により打撃を受け、新宿へ演劇人が移転してきた。そして、彼らにより劇場「ムーラン・ルージュ新宿座」が開かれた。建物はもともと「新宿座」という映画館であったが、浅草オペラ出身の佐々木千里が1931年にムーラン・ルージュを開業し軽演劇を提供することになった⁽¹⁵⁾。このほか、銀座を中心に興行施設を建てていた東宝・松竹によって、新宿映画劇場、新宿松竹映画劇場など映画館が建てられた。さらに、1903年に東京市電が新宿から半蔵門間で開通し、1915年に京王電気軌道（新宿追分駅）が、1927年に小田急線（新宿駅）、西武鉄道（高田馬場駅）が次々と開通した。鉄道という交通網の整備により、新宿は郊外からの人やモノが集まるターミナルになっていった。

そして、現在の新宿駅近隣に三越（1925年）、当時の新宿追分駅近隣に伊勢丹（1933年）が開業した。周辺には映画館も多く開業した。新宿初の映画館の大幸館（1909年開業）が太宗寺境内に建てられ、1920年には武蔵野館が開館した⁽¹⁶⁾。また、田辺茂一は、1927年に紀伊國屋書店を創設し、2階に日本橋の丸善、銀座の資生堂につぐ東京で三つ目のギャラリーを開いた⁽¹⁷⁾。当時の新宿には郊外の住民が新しい文化を求めて集まってきた。

3.3. 戦後の劇場・映画館等の集積

これらの娯楽施設や商業施設の多くは東京大空襲で一度なくなってしまうが、戦後はターミナルとして、新宿マーケットを率いた関東小津組が活躍し、

多くの人が物資を求めて集まり新宿は復興の拠点となった。焦土と化した新宿にはまた、映画館や劇場などの娯楽施設が建てられ、多くの名曲喫茶やジャズ喫茶といった音楽系喫茶が存在した。当時の新宿では進駐軍のクラブミュージックが流行し、楽器店の集積もおこった。

レコードを流した名曲喫茶の草分け的存在として、新宿駅東口の「風月堂」が1947年に開店し、洋菓子や飲み物を提供するほか、クラシックが好きだったオーナーのレコードを店内でかけるようになった⁽¹⁸⁾。店は、音楽、美術、文学、映画、演劇などさまざまなジャンルに関心を持つ人々の文化的なサロンになり、前衛・抽象絵画の個展が開かれるなど、芸術家の作品発表の場となった。当時の来店者には、岡本太郎、寺山修司、岸田今日子、蜷川幸雄がいた。

3.4. アングラ文化の誕生

高度経済成長期の1960年代、新宿は社会運動や、小劇場演劇などのアングラ文化の拠点となり多くの若者を集めた。1962年に映画館兼劇場の「アートシアター新宿文化」ができ、多くの芸術家が集まってきた⁽¹⁹⁾。1967年に「天井桟敷」を旗揚げし、1969年には渋谷に拠点を移した寺山修二や、演出家の蜷川幸雄などが上演した。

1964年に紀伊國屋ビルが建築された際も、ホール（紀伊國屋ホール）や画廊が併設され、新進の演劇人や画家たちに発表の場を提供した⁽¹⁷⁾。紀伊國屋ホールでは、文学座、民藝、こまつ座、つかこうへい事務所など、日本を代表する劇団や新進の小劇場演劇の劇団が公演を行った。

この頃、文化人が通ったといわれる居酒屋や喫茶店も現れた。例えば、「新宿ゴールデン街」は、もともと戦後「赤線」に対して「青線」とよばれる非公認の売春宿の集まる地域であった。1949年の露店撤去令によって、新宿二丁目からも、多くの店舗が新宿三光町に移転し、今の新宿ゴールデン街が形成された⁽²⁰⁾。1958年、売春防止法の施行を受け、木造建築の建物は残したまま、多くの店は飲食業などに業態変更し、やがて多くの文化人が集まるようになった。

他には、1963年に二幸（現、アルタ）裏に開店した「DIG」は正統派ジャズ喫茶として知られ、大学関係者、一般のジャズファン、ジャズや映画評論家の植草甚一、小説家の村上春樹、寺山修司、中上健次らが訪れた。オーナーの中平氏は、1967年には「DUG」を新宿紀伊國屋裏に開店し（2007年閉店）、1977年には新宿靖国通りに「New DUG」を開店させ2007年にはライブハウスDUGとして再スタートした⁽²¹⁾。また、1968年に開館したアシベ会館にはジャズ喫茶「アシベ」も併設されていたが、今はホールだけが残っている。

このほか戦後には、女性教育者の関鑑子によるうたごえ運動や、クラシックや労音の関連する音楽団体もあった。

3.5. 1970年代以降のテレビ文化・ライブ文化

テレビの登場とともに、区内には、1956年に文化放送、1957年にフジテレビジョンが設立され、周辺には芸能プロダクションが生まれた³⁾。そして、ジャズ喫茶には渡辺プロダクションをはじめとする芸能プロダクションに所属するバンドが登場するようになった。1978年にロックの殿堂と呼ばれた「新宿ルイード」がオープンしたが、これは音楽プロダクションが運営に携わったライブハウスの先駆けであった⁽²²⁾。

さらに、ライブハウス「PITINN」は1965年に開店し、渡部貞夫、山下洋輔、浅川マキなどが出演した。また、「ジャズスポットJ」は、1978年に早稲田大学モダンジャズ研究会のバンド仲間であった幸田稔、森田一義（タモリ）たちが開業し、ジャズミュージックのライブハウスとして営業してきた⁽²³⁾。森田氏は、その後も1980年に新宿三丁目に設立されたスタジオアルタを拠点に、テレビ番組を通して文化を発信した。

一方、1960年代後半から音楽が大衆化していきフォークやロック音楽を演奏する空間が求められる中で生まれたライブハウスもあった。代表的なものに、ライブハウス「ロフト」がある。平野悠氏は1971年に世田谷区の鳥山に「ロフト」開業し、1976年に「新宿ロフト」を西新宿で開店した⁽²⁴⁾。さらに1995年にトークイベント「ロフトプラスワン」

が開館した。「新宿ロフト」は、1999年に歌舞伎町コマ劇場横に移転している。1980年に「新宿JAM」が歌舞伎町に開店した。新宿JAMは現在、新宿ロフトで演奏する前にバンドマンたちが利用する登竜門的な存在になっている⁽²⁵⁾。また、1980年代のバブル期にはライブハウスビジネスに乗り出す企業もあり、新宿には「日清パワーステーション」があったが、景気低迷とともに閉鎖している⁽²²⁾。

また、劇場では、1980年代新宿2丁目に開館した「タイニイアリス」(2015年閉館)や新宿3丁目の「シアタートップス」(2009年閉館)などがあったが、現在は閉店している。区内にいくつかの居酒屋を経営する太田篤哉氏は、2006年にフリースペースとして「SPACE雑遊」、2015年に「SPACE梟門」を開場しているが、これらも現在改修工事中で小さな劇場は減少している。

4. まちの魅力形成メカニズム

本章では、前章までの歴史的経緯を受け、地域資源がまちの魅力に転換し、人々をひきつけていったメカニズムを考察する。

4.1. 地域資源の集積と多様な人々のまち

第3章の集積の経緯を整理すると、新宿に地域資源が集積する過程にはいくつかの段階があったといえる。まず、江戸時代には江戸の周縁にあり、新しい宿場町として誕生し、現在の盛り場の基礎を用意した。大名屋敷などの広大な種地の存在により、大学などの公共施設が集積した。さらに、地盤が強く、関東大震災後に先進地から資源が流入した。また、近代には多くの鉄道網がひかれ、交通の結節点としてのターミナル駅になり、郊外や地方からの居住者をひきつけるようになった。様々な人が集まって来た新宿には、劇場やライブハウスなどの実演芸術の上演のできる施設があったとともに、喫茶店、カフェ、居酒屋など、互いに交流や議論ができる場があり、まちの劇場、神社や空間を利用して、アンダーグラウンドで実験的な芸術活動が開花した。

つまり、戦前から現代にかけて、新宿の文化は、作家・芸術家、社会主義者、キリスト教活動家、女性など、有名無名を含め、様々なバックグラウンド

の人々が混在することで生み出されてきたといえる。新宿は周縁であるがゆえに、新しい思想や文化を受け止めることができる、「寛容性(大らかさ)」を持っていた。明治時代に入り、西洋から新しい思想や制度が持ち込まれると、周縁であった新宿は中心から排除された、キリスト教徒や女性教育者・女流作家、プロレタリア活動家や異色の芸術家などが活躍した。中心部では「異端」として認識されていた人々が、このまちでは一つのアイデンティティとして尊重され、失敗しても再びスタートラインに立つチャンスを与えられていた。そして、多様な人がいることで、共に同じゴールを目指せる人を探ることができ、それが新たな価値観や生き方を創造するパワーとなっていた。

しかし、単に地域資源が集積するだけでは「魅力」にはならない。「魅力」として人々の心をひきつけるためには、これらの地域資源を活用して、他のまちにはない、独自性のあるものを創造することが必要になる。この「まちの魅力」とつながる重要な鍵として、様々なバックグラウンドや知識、能力を持つ人々がいて、彼らが議論や交流を行うことができる「場」が存在していることがあった。そこでは人と人、人とモノなどの多様な資源が結びつきあい、これまでにない新たなものを創造することができた。例えば、彼らのサロンや交流のネットワークから、社会慈善運動、アングラ文化等が発展していった。

さらに、様々な人々がこのまちに集まってきた理由について、「新宿区のまちの魅力の研究」で平成29年4月から12月までに実施したインタビューをもとに考察する。

まず新宿区をはじめとする関東近郊の創業支援に携わる有限会社のA氏は、IT産業の創業や事業にとっては、ビジネスモデルよりも誰と仕事を行うかが重要だと感じると語っている。新宿にはIT産業の事業所が集積している。それによって、事業者間のコミュニケーションコストが下がり、エンジニアらの情報共有や協力を可能にするという。また、民間の芸能会社の芸人のB氏も人の付き合いが重要であり、仕事以外の付き合いの中で、仕事につながっていくと語る。さらに、B氏は、多様な顔を持つ新宿のまちで、

人を観察することや、人と触れ合うことで生の情報を得て、芸を生み出すことがあると語る。

このように新宿は、新しいことを行っていく上で、パートナーとなる人を探しやすい環境にあることが示唆されている。

4.2. 文化を創造するための環境要因の考察

次に、劇場、ライブハウス、ダンススタジオ（以下、劇場等）というパフォーマンスの場に注目して、それがどのような環境で様々な人をひきつけ、独自の文化が創造されたかについて考察する。具体的には、劇場等がどのような建物に設置されているかをみることで、地域資源の集積する環境要因について考察する。

まず、23区の劇場等の収容人数別の施設数をみると、新宿区内には128軒の劇場等があり渋谷区に次いで多い（図3）。新宿区の劇場等を収容人数で見ると100人以上500人未満の規模のものが最も多いが、100人未満の小規模な施設は、新宿区が35軒と23区で最も多くなっている。

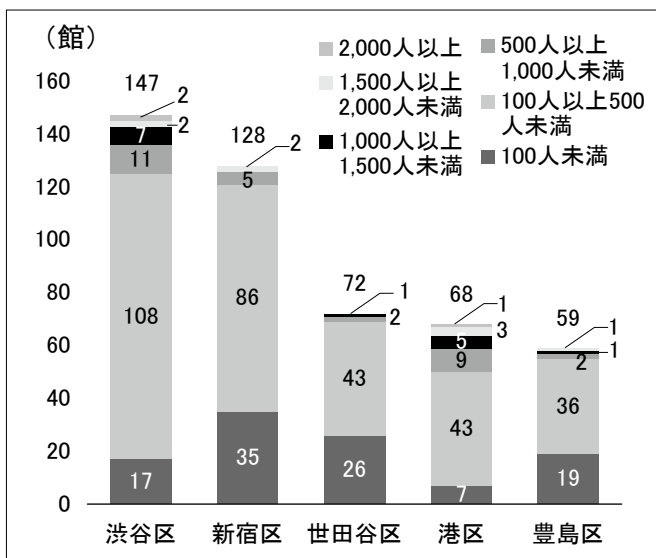


図3 23区上位5区の収容人数別劇場数
出所：東京都生活文化局 Web サイトより作成

不特定多数の観客に向けた商業演劇でなく、個々に旗揚げされた劇団が活動するためには、500人未満を収容する小さな劇場等が重要である。佐藤⁽²⁶⁾は、1960年代から70年代のアンダーグラウンド演劇から始まる1980年代の社会現象となった小劇場演劇のブームについてインタビューなどをもとに次のように分析している。1960年代から70年代のアンダー

グラウンド演劇は、社会風刺の特性を持ち、不特定多数の観客に向けた演劇を公演するものではなかった。1980年代から90年代頃に都心近郊で、「遊眠社」「第三舞台」などの劇団が次々と旗揚げされ、動員数を増やしていった小劇場ブームについても、そこでみられたのは個々の劇団が小さな劇場での公演を繰り返して、コアの客や口コミを通して徐々に観客を増やしていくという戦略であった。

しかし図3の結果には、知名度の低い小さな劇場やライブハウスは一部しか含まれていなかったため、それを補完する形で、新宿区にある劇場等の情報を電話帳、インターネットより収集した。調査の結果、190館のデータを収集し、それぞれの施設について建物の築年数、建物階数、施設の入っている階数、標準面積、賃料を調査した。このうち施設の入っている階数については劇場等のWebサイトより、建物の築年数、建物階数、標準面積、賃料については不動産会社のWebサイトより収集したが、標準面積、賃料については一部のデータしか得られなかったため、本稿では割愛する。

まず、劇場等のある建物を築年数でみた結果、1960年代から1980年代までの建物が半数を占めていた（図4）。

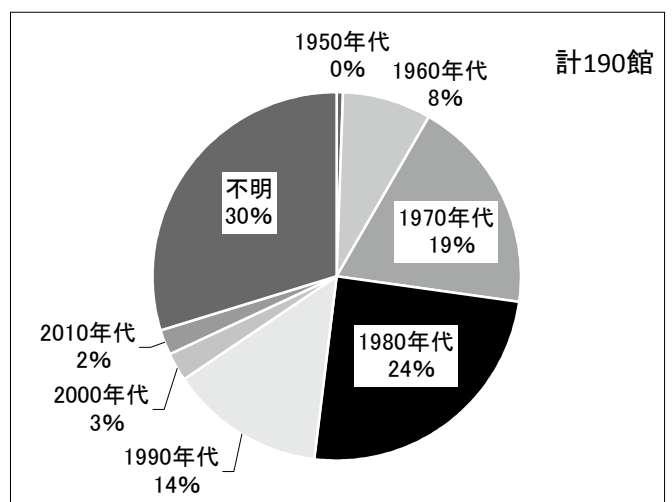


図4 劇場等のある建物の築年数でみた割合
出所：Web サイト等で収集したデータより作成

次に、劇場等が地上何階建ての建物に入っているかについてみた結果、3～9階建てがほぼ同じ割合で約6割を占めていた（図5）。

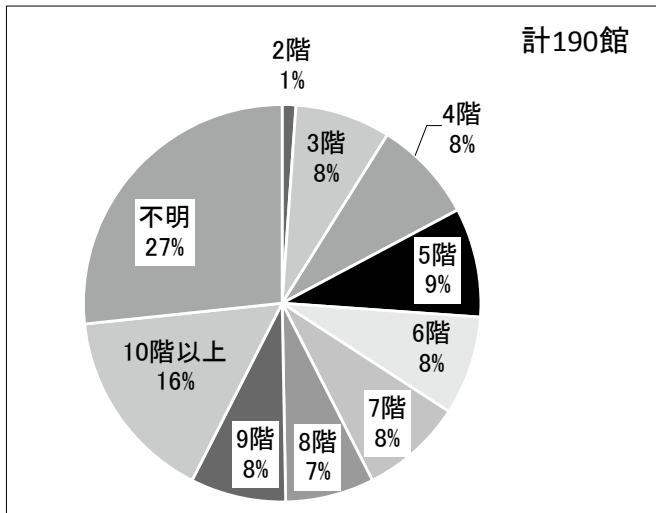


図5 劇場等のある建物の建物階数でみた割合
出所：Web サイト等で収集したデータより作成

さらに、劇場等が入っている階数をみた結果、地下1階に入っているものが4割以上と最も多かった(図6)。

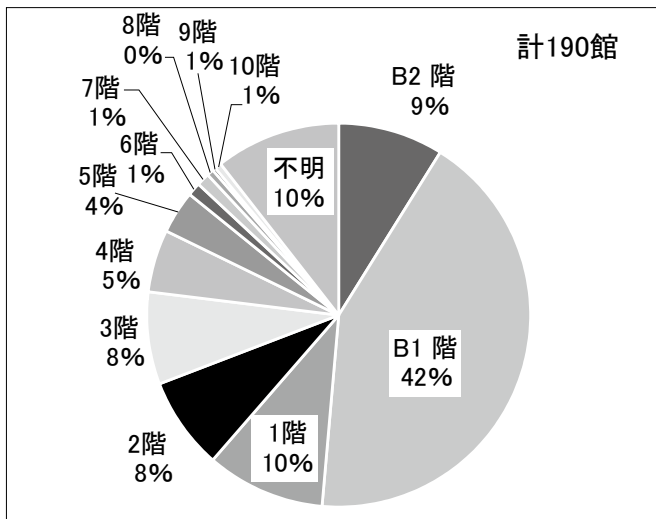


図6 劇場等が入っている階数でみた割合
出所：Web サイト等で収集したデータより作成

これらから、新宿区にある劇場等の多くが、築年数が30年以上経っている3～9階建ての中層の小規模な建物に入っており、地下階に設置しているという特徴があった。ここから、メジャーでない個性ある文化芸術団体が活動するためには、ワンフロアに500人未満の観客席が入るような建築物の存在が重要であったことが示唆された。

4.3. まちの魅力形成のメカニズム

これまでの結果を整理し、図7のような魅力の形成メカニズムを作成した。

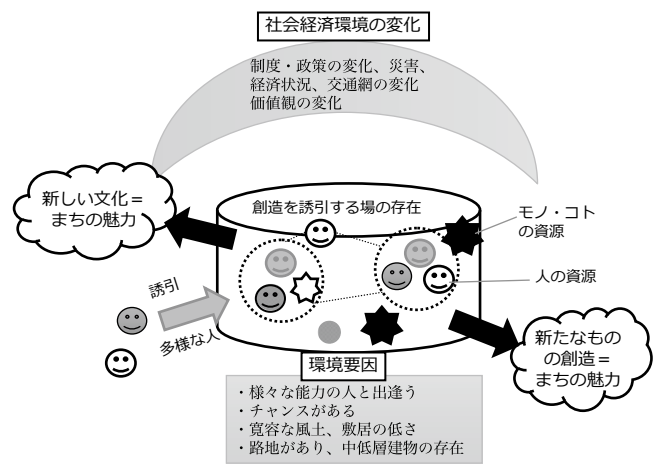


図7 まちの魅力形成のメカニズム
出所：筆者作成

新宿のまちには、小さな雑居ビル、喫茶店や劇場、映画館があり、人々の交流や実験的な作品の上演のための空間が用意されていた。それらの施設には、商業的な目的のためでなくリスクをとって、実験的な作品を上演するなど、先端的な試みを行うものがあつた。まちの中にそのような場が多数あることで、各所で人と人の交流が起り、新たな文化が創造されていった。

なお、このサイクルは、制度・政策の変化といった社会経済環境の変化に影響を受けることが考えられる。現在の建築年代別の事務所床面積をみると、新宿は70年代から90年代の建物が多いことがわかる(図8)。千代田区や中央区では、それより以前の60年代の建物が多かったが、近年の再開発で古いストックは新規の高層ビルに生まれ変わることが予想される。今後は、新宿も再開発等の影響を受け、小劇場などが設置できる「場」は、減少するのではないかと考えられる。

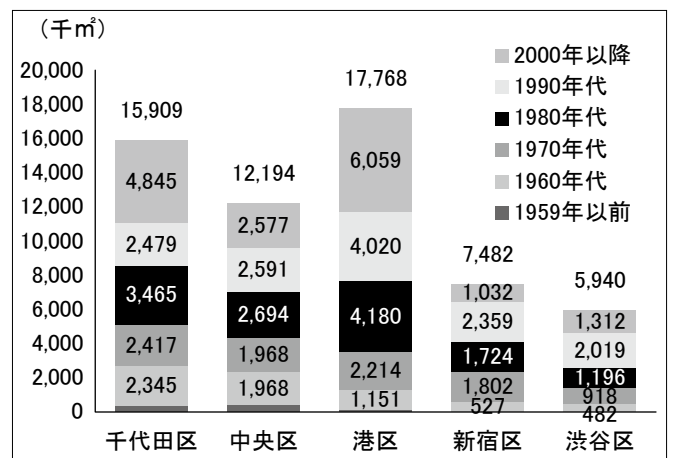


図8 都心5区の建築年代別事務所床面積
出所：東京都「東京の土地 2014 (土地関係資料集)の概要」より作成

5. おわりに

以上の議論を踏まえ、今後もまちが魅力的であり続けるための方向性を検討する。そして、これらの研究で得られた知見が、どのように福岡市の都市政策に寄与するかを示す。

本論から明らかになったように、新宿では、中低層の小規模な建物に多くの劇場等が入っていることが明らかになった。これらの建物が多くストックされていることにより、多様な人々が個性あるパフォーマンスや事業を生み出すことができていると考えられた。

現在、劇場等が入っている建物の多くは老朽化している。今後、新宿も再開発によって、これまでに新宿の文化を牽引してきた人々がより郊外へと移転していくことが予想される。様々なバックグラウンドの人々が混在し、人的交流やネットワークを作ることができる環境をどのように確保するかを考えなくてはならないだろう。そこで、まちづくりの視点からは、以下の2点を提案したい。

①多機能（ミクストユース）なまちづくりの推進

現在の新宿駅の東口側は、オフィスや住宅の要素がなく、商業や飲食の単一用途で構成されている。そのため、顧客をまちの外側から呼び込まないと十分な需要を満たすことができない。今後は、交通網の整備により都内の各所にターミナルができ、商業施設もできることから、新宿の外側からの商業や飲食の需要は減少していくことが考えられる。そこで、次のような提案を行う。

- ・多機能な構成のまちにすることで、需要を生み出すことのできるまちを創出する。
- ・職住が近いことで、昼夜の人口の差が縮まり、いつも賑わいを造ることができる。

②新旧を併せもつ空間の創出

西新宿の高層ビル街を除くと、新宿の商業地は道路幅が狭く、比較的低層の土地利用が残り、中小規模の建物が多い。新宿3丁目から四谷にかけて、神楽坂周辺などは、1960年代から70年代にかけて建築された雑居ビルが多く、また、百人町や新大久保

にかけては、木造の賃貸住宅や店舗が多い。古い建物が残っているため、比較的安価な事務所・店舗や住宅があることで、多様な企業や店舗が集積し、多国籍や様々な職業の人々が共生できる空間を形成している。

都心部の開発をみると、高層ビルによる大企業の集積、有名店が連なるおしゃれな街並みなど、ハイグレードで均質化したまちづくりが行われている。開発エリア内には、個人経営の店は出店が難しく、世界中どこにでもある店が立地し、ある一定層の人しか住むことができなくなる。それに対して、市場の開発ポテンシャルを活かしながらも、地区計画などの手法を用いて、高密度の再開発を進めるエリアと中低層の古い街並みを残すエリアを分けることなどで、新旧を併せもつ空間を創出することを提案する。以上、本稿では新宿区を事例に、まちの魅力を生み出している多様な人々が集まってくるのに必要な環境要因の一つについて議論してきた。魅力あるまちは、多様な人が集まり交流することで、新しい文化や創造を起こすまちであり、そのためには「場」とそれを確保するためのまちづくりが必要である。

福岡市は、クリエイティブ産業の全産業に占める割合が東京都区部、京都市、大阪市に続く第4位で、2014年から2016年にかけてクリエイティブ産業の事業所の増加率は全国的にみても高い⁽²⁷⁾。これは、先進的に税優遇措置などの創業支援事業を行ってきたことにより、開業率が他都市より高くなっていることが一因にある。そして、これにより、若者を中心に人口が増えている。

福岡市の都心部では、これまで航空法により高さ制限があり、大規模ビルの供給が抑えられており、中小規模の築年数の古い建物のストックが多い⁽²⁸⁾。このため、豊富な食や芸能文化を支える飲食店や各種スクール、安い住宅などの立地を可能していることが推測され、新宿と類似する点が多い。近年、規制緩和により、都心部での再開発が大規模に進行していることについても同様である。したがって、本研究で得られた知見が、福岡市が人口減少時代にも魅力あるまちであり続けるためのまちづくりを検討する際に新たな視点を与えることができると考えられる。

注釈

- 1) 新宿自治創造研究所の研究成果は、「研究所レポート2016新宿区のまちの魅力の研究(1)ーにぎわいの実態把握と意識面からみる魅力の分析ー」および「研究所レポート2017 No.3新宿区のまちの魅力の研究(2)」として公表されている。なお、本研究は平成28-29年度の新宿自治創造研究所の研究成果の一部を用いたものであるが、本稿は執筆者らによる個人的見解である。
- 2) 地域資源とは、地域の活性化に重要な特産品や観光資源を特に示す場合もあるが、本論では、地域の魅力につながる人、モノ、コトすべてを含んでいる。
- 3) フジテレビジョンは、現在は区外に移転している。

参考文献

- (1) 松沢光雄：繁華街を歩くー繁華街の構造分析と特性研究（東京編），総合ユニコム選書，1986.
- (2) 牛垣雄矢：商業地における地域的個性の形成に関する一考察：東京の都心周辺地域を事例として，学芸地理（69），pp.30-45，2014.
- (3) Le Corbusier：*Manière de penser l'urbanisme*，Editions de l'architecture d'aujourd'hui，1947.
- (4) Jane Jacobs：*The death and life of great American cities*，Harmondsworth，Middlesex：Penguin Books，1961.
- (5) Allan Jacobs and Donald Appleyard：*Toward an Urban Design Manifesto*. Working Paper published 1982.
- (6) Richard Florida：*Who's your city?：how the creative economy is making where to live：the most important decision of your life*，Basic Books，2008.
- (7) 吉見俊哉：都市のドラマトウルギーー東京・盛り場の社会史，弘文堂，1987.
- (8) 増淵敏之：路地裏が文化を生む!ー細街路とその限界の変容，青弓社，pp.30-32，2012.
- (9) 戸沼幸市編著：新宿学，紀伊国屋書店，2013.
- (10) 新宿区生涯学習財団新宿歴史博物館編：新宿ゆかりの文学者，新宿歴史博物館，2007.
- (11) 茅原健：新宿・大久保文士村界限，日本古書通信社，2005.
- (12) 牛垣雄矢：東京内部地域における商店街の歴史的变化ー神楽坂を事例として，日本大学文学部自然科学研究所研究紀要No.47，pp.13-21，2012.
- (13) 東京花柳界情報舎「花柳界の歴史」<https://www.tokyo-geisha.com/html/article/history01.php>
- (14) 神崎宣武：盛り場の民俗史，岩波書店，1993.
- (15) 中野正昭：ムーラン・ルージュ新宿座ー軽演劇の昭和史，森話社，2011.
- (16) 新宿区立新宿歴史博物館編：キネマの楽しみー新宿武蔵野館の黄金時代，新宿区立新宿歴史博物館，2007.
- (17) 新宿区立新宿歴史博物館編：新宿歴史博物館特別展 田辺茂一と新宿文化の担い手たちー考現学、雑誌「行動」から「風景」まで，新宿区立新宿歴史博物館，1995.
- (18) 奥原哲志：琥珀色の記憶ー時代を彩った喫茶店，河出書房新社，2002.
- (19) 葛井欣士郎，遺言：アートシアター新宿文化，河出書房新社，2008.
- (20) 渡辺英綱：新宿ゴールデン街物語，講談社+α文庫，1986.
- (21) 50年以上の歴史を誇るジャズ喫茶の名店！新宿『DUG』オーナー中平穂積さんに聞く『カルチャーの集合地が育つまで』https://greenz.jp/2015/02/24/otomachi_dug/
- (22) 宮入恭平：ライブハウス文化論，青弓社，2008.
- (23) Jazz Spot J shinjuku 「『J』について」http://www.jazzspot-j.com/what_j.html
- (24) 今井智子：新宿ロフト、40年の存在感，「朝日新聞」2016.11.18（夕刊）.
- (25) 新宿区編：新宿区成立70周年記念誌 新宿彩

(いろいろ) 物語, 新宿区, 2018.

- (26) 佐藤郁也: 現代演劇のフィールドワーク--芸術生産の文化社会学, 東京大学出版, 1999.
- (27) Fukuoka Fact <http://facts.city.fukuoka.lg.jp/data/creative-buisiness/>
- (28) 竹内一雅: 福岡オフィス市場の現況と見通し (2016年), ニッセイ基礎研究所 <https://www.nli-research.co.jp/report/detail/id=52463&pno=1?site=nli>